

るの は な

千葉大学医学部同窓会報 第78号 題字 鈴木 五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2038

新任教授あいさつ

藤村真示教授 (生化学第一教室)

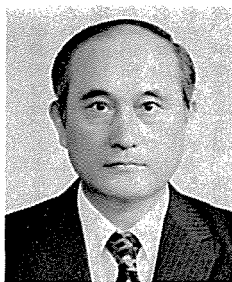
昭和35年卒



を待つてまいりました。
設備など財政面では断然優位にある県がんセンターを辞しましたのは、本学が母校であるということとあります。口幅つたいい方かも知れませんが、同窓の一員として後輩を指導するということは、

蟹沢成好教授 (横浜市立大学医学部病理学教室)

昭和31年卒



この度、横浜市立大学医学部第一病理教授に就任致しました。教授会の諸先生はじめ、先輩、級友の諸兄に多大の御力添をいただきました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

滝沢延次郎教授の下で病理学を志し、その後相模前学長の腐敗研(現生物活性研)を経て東京都老人総合研究所太田邦夫所長(前東大病理教授の下)におりましたが、滝沢、太田という二人の卓越した病理学者の下で病理学と肺癌発生

それなりの特徴があろうかと思えます。研究課題も、こちらでは、腫瘍からだけでなく広く求めたいと思います。また、大学院生の一時期を第二外科(中山恒明教授)で学んだことがあり、臨床にも興味をもっておりです。これまでの十六年間は、学外で、他との協調を保ちながら仕事を続けてまいりました。皆様から、どうぞ、他学出身の同窓会の方々からも、心おきなくお声をかけられ、御指導と御支援を賜りますよう心からお願いいたします。

前田和一教授 (埼玉医科大学)

昭和26年卒



埼玉医科大学小児科学教室が昭和48年4月に正式に誕生して以来、教授の職にあつて、教室の創成と発展に努力してこられた中山喜弘前教授(慶大・昭16卒・中山恒明先生の実弟)が本年二月に亡くなられました。その後任として小生が選出され、八月一日付をもって教授に就任いたしました。

当教室は創立以来八年という、まだいかにも幼い教室で、内容の充実していない点もありますが、人事の面では若い大学なりに自由のきくところもあります。創生期には、恩師久保政次前千葉大小児科教授ならびに中島博徳現教授の御尽力のお蔭で千葉大学から多くの人材に来ていただいて、着々と整備されてまいりました。すなわち、専門分野別にみますと、内分沁に松本主講師(36卒)小児神経学に諸岡啓一講師(41卒)小出博義助手(49卒)鈴木文晴助手(53卒)新生児・未熟児に宮路太助

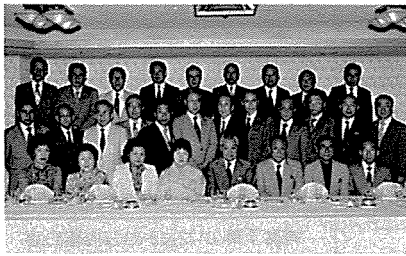
様の一層の御発展と御健康を祈つてやみません。横浜の地へ御出かけの折は、是非御立寄り下さるよう希っております。

手(47卒)伊古田裕子助手(51卒)腎疾患の分野に森野正明助手(50卒)と優秀な人材がおり、このほか、非常勤講師として堀宮次(23卒専・上原すず子(31卒)栃木亮太郎(40卒)の諸先生にも御指導を仰いでおり、現在教室員28名という世帯であります。

クラス会たより

昭和14年卒 クラス会

本年6月20日、奥湯ヶ原、加満田にて昭和14年卒業の18名が集い、クラス会を開いた。出席者は、村田謙輔、岩田恵夫、岩下智一、小谷暢、大村健二、大倉正二郎、小川喜一、佐藤勝、莊延秋、小高四郎、村尾正、正宗幹夫、中島保雄、眞岡修、鈴木嘉一、安達元郎、今井辰治、川越不二男。幾らか年を

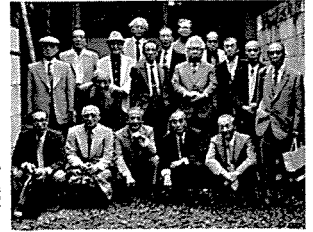


八千会・ホテルニュー大谷 56.5.16

八千会(昭和26年医専卒) 三十周年記念

一九八一年五月十六日、ホテルオークタニにおいて八千会三十周年記念同窓会が開かれました。「八千会」とは、一九五一年(昭和26)千葉大学附属医専八回生の集りです。

14卒・クラス会



奥湯ヶ原・加満田 56.6.20

とつたように見えても、戦前の千葉医大当時の意気は変らず、楽しく一夜を過ぎ箱根神社に詣で、小田原で解散した。一同母校の健全な発展を願っていることも相変わらずだった。(川越不二男)

す。「八千」は「破船」に通じます。第二次大戦の影響をものを受けて、何れも前身の母校を失い、転校という形で、一九四七年千葉に流れついた群です。

この寄り合い世帯のような私達が、一九五五年(昭和30)卒業第一回目の同窓会を開いてから、何と十八回を迎え、卒業三十周年を祝うに至りました。卒業時総数四十五名(内死亡三名)中二十六名と、同伴夫人四名、恩師中村民比古先生の出席を頂き、計三十一名が集りました。北は北海道から、四国九州、沖縄まで参加しています。会長の挨拶を皮切りに、次々と卒業三十年の感慨がのべられ、終始飾らず、おごらず、しかし感激の熱気につつまれ会です。現在、記念誌発行を期して準備中です。破船会の面々は、今日といえども決して順風満帆という訳ではありません。しかし、権威主義の世

昭和29年卒 クラス会

の風潮の中で、荒波にもまれながらも、励まし合い、支え合いながら誠実に生き続けてきた仲間としての誇りをもっています。加えて名会長、森垣、名幹事太田和明の存在によって今日まで支えられ増々発展しつつあります。年を経るに従って、今迄以上に貴重な会となつてゆくことを、確認し合っています。(広報担当・石川鉄男)

卒業後意慢であり開かなかつたわれわれクラス会も、ここ数年定期的にこなされるようになってきた。昭和56年度は群馬県在住の3名(鹿山、根本、長谷川)が幹事をかって出て、去る5月23日(土)の夜、伊香保温泉福一旅館にて開かれた。日本全国に散らばって活躍している同級生から、遠くは島根県の清水(雅久)や富山医科薬科大学眼科の窪田夫人(旧姓・菅原)の参加を得て、29人が集まり、更に夫人・子供を同伴したものの10人(同伴者数11人)が加わって、にぎやかなクラス会となった。

昨年度松沢、西宮の両君を失ったので、黙禱をささげてからクラス会のはじめ紹介。医学部や附属病院の近況紹介、現在の自己紹介とすると酒も回って来て、よくある風景のごとく野次と騒音でよくわからなくなりが進行した。大学では大藤が助教授(第一内科)となり、ますます超音波で腕をあげているし、また有水、島崎、土屋(尚義)、樋口の仕事ぶりがの

29卒・クラス会



伊香保温泉・福一旅館 56.5.23

べられた。羽生は東京女子医大・消化器病センターで胃や胆嚢をとっているの、われわれも病気になつたらお願いしようとのことだった。われわれのクラスは若干の年長者以外は昭和一ケタ、しかも約半分は兵隊の学校経験者なので、働くのみの余裕のないものばかり、従つて集つたものは病院勤務、開業たるを問はずいずれも医療のペテランばかりで心強い限りであった。クラス会の途中で八木節バンド・オーケストラのショウとなり、いつの間にか散会した。

来年は神奈川県在住のもの幹事ということで、全員の再会を約して四散した。(島崎 淳)

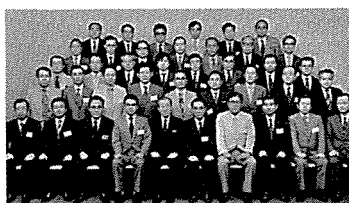
五五会(昭和30年卒) クラス会

新制大学医学部として第一回卒業生であるわれわれはほとんど毎年クラス会を開催している。本年は六月十三日に東京在住の小児科の方々、浅利行男、石井誠一、石神一良3氏のお世話で新橋第一ホテルで開かれた。香月学長が忙し

いスケジュールをさいて御出席いただき、格調高い話を出席した全員がうかがい感銘するとともに在学中の思い出を呼びおこした。クラスの大部分の方々はすでに半世紀以上の歳月をすごしたためか中心となる話題は、数年前の医療最前線のことは少く、生活に余裕の出来たせいから第二第三の人生のプランや子供の将来等の話題が多くなったようである。しかし会も後半をすぎず頃から二十数年前の童心に帰つて、在学中の思い出等がかたられるようになり往年の活気ある会となった。

われわれの年代は戦前の軍国教育をうけ、終戦後の復興も十分にない頃に医学教育を受けた。とくに基礎医学は矢作のブラック講堂で講義を聞いた。教科書・参考書も十分でなく、当然スライドやゼロックス等はもろろなく、講義ノートがおもな勉強材料であり、野口英世が使用したような顕微鏡で組織学実習をうけ、照明装置や実習室の電灯すら十分でなく、したがって日がくると暗くなれば顕微鏡はみえなくなつた。当時メニューインの演奏会があり、やつと入場券を手に入れ日比谷公会堂に行った思い出がある。卒業する頃から経済状態も徐々によくなり、のはな会の卒業パーティは今の同窓会館一階で行われた記憶がある。そのような思い出をよみがえらしているころクラス会も終りに近づいてきた。会食でもわれわれのクラス会では、料理は殆んど残ることもなく、ビールは腹が張るという今の若い人々の習慣はない。

55会・クラス会



新橋第一ホテル 56.6.13

三五会(昭和35年卒) 二十周年記念

アルバム完成

昭和35年卒(さんご会)一同は、昨年卒業後20周年を迎え、このほど記念アルバムを作成、同窓会本部に寄贈された。幹事は岩崎勇・植松良夫・嶋田裕・工藤純孝等の諸先生で、九十頁余の小冊子であるが、殆んど会員の家族の写真・近況報告が網羅されており、顔なじみの方々、ご家族が大きくなられ、さらに10年後、20年後楽しみとなる記念アルバムと拝見した。

神奈川ゐのはな会

支部集会のありかた

5月15日、相模川の鮎釣りの景勝で知られる田名水郷の大黒屋に浜松医大の植村研一教授(脳神経外科・本学昭和34年卒)をお招きして、28名の会員が参集した。

地理的不便のためか、参集者が少なかつたのは残念であつたが、桜井太幹事(昭18年卒)、野呂忠恵助教授(昭34年)、相模原北里大学地区幹事の御努力により、久しぶりに美人芸妓の相伴で楽しい水郷の春宵であつた。

田中洋支部長(昭16年)の留任挨拶で同窓親睦の強調につづいて植村教授の「頭痛(各科領域にわたる)——新しい観点から」の特別講演、安孫子連四郎顧問(昭10年)の謝辞、石井克己(昭24年卒)、広田和俊(昭27年)両理事の事務報告、津田修二顧問(大12年)の乾盃で宴会がはじまり、末永直光幹事(昭20年卒)の独唱、美人芸子の舞、植村教授の即席落語と舞につき、時が忽ち深更に及び、木川田隆一教授(昭30年)、吉田充幹事(昭23年)の周囲に学問の香り賑やかで、とても楽しい雰囲気であつた。

同窓会共通の若年層不参加傾向の問題は、一昨年のゴルフコンペで若年層15名が動員でき、今回も富田裕先生(昭30年)を新幹事に迎えて、若年会員の結束と懇親を高めるよう努力され、改善しつつ

ある。楽しい親睦の会だけでなく、参集すれば知的に豊かになるよう、植村教授の特別講演は、前回の中山恒明教授、木川田隆一教授の時と同様、大きな成果を上げたと思う。会に出席すれば旧交を温め、結束を固めて、楽しむばかりでなく、本業である臨床上のプラスも

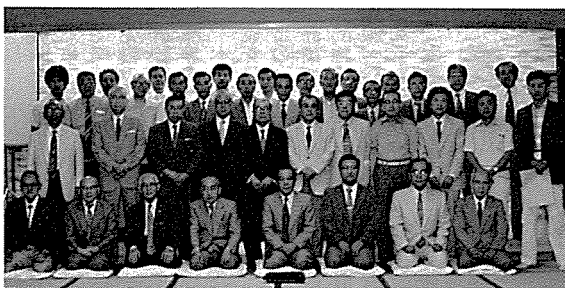
埼玉ゐのはな会

ゐのはな会、埼玉支部の総会を松永松男先生(昭10年卒)、名尾良憲先生(昭13年卒)の叙勲のお祝いをかねて、七月十二日に大宮で行いました。

大学本部より井出源四郎医学部長、地元から防衛医大産婦人科小林充尚教授(昭34年卒)をお招きしました。

叙勲のお祝いのあと、名尾先生の消化性潰瘍の薬物療法、小林先生より婦人科における超音波診断についての講演、井出先生より学内事情および医学的漫談をお聞きした上で宴会となりました。

埼玉県支部長の上川名誠一先生(昭12年卒)をはじめ出席された四十数名の会員一人一人が、回想なり抱負なりを述べられ、宴を盛り上げて、若年会長の結束と懇親を高めるよう努力され、改善しつつ



なみいる美女達も顔色ありませんでした。(文責、井上幸万)

必ず持ち帰っていただくよう努力してきている。納入会費も、通信連絡、冠婚葬祭ばかりでなく、全員に還元すべく、ブライマリー・ケアシリーズの植村教授の名著「頭蓋内疾患の初期診療」を会費納入者全員に配布し、臨床上の収穫を約束し得たと思う。ゐのはな同窓会本部においても、全員の利益となる医療問題の中央機関として企画提供していただければと思うところである。

今回の特別講演では、植村教授の欧米日本での体験に基づいた症

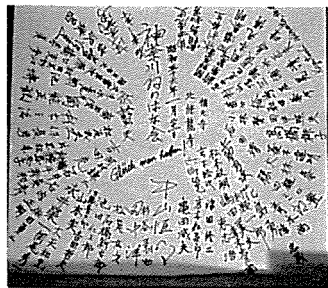
神奈川 医学 薬学 合同

ゐのはな会

セファロスポリン系の第二世代第三世代の相次ぐ出現、インターフェロン、人工血液、サイメチジンなど新薬の次々の出現は、臨床医にとって常時の勉強を要請している。又行政的にも医薬分業の方向がかなりさまをなしてきた。薬価の引き下げ、医療技術料の評価など、これから先、薬学医学の情報交換交流はますます密接化が必要となつていく。

神奈川県ゐのはな会は、医学三百五十名、薬学二百五十名の会員数で、医学薬学それぞれ独立した例会、懇親会が毎年一、二回ずつ開かれてきたが、昭和五十五年二月横浜中華街で十数年ぶりの合同ゐのはな会が復活した。その会は薬学主導で開催されたので、本年は医学主導で一月二十一日、新年会を兼ねて、参加者医学四十二名、薬学三十三名にて開催された。開会の辞は北條龍彦(昭16年)医学県副支部長によって、薬医提携の

例一例ごとの解説で、ポリクリ時代に覚えた諸反射が、いかに近視眼的であるか、頭痛につけられる病名が、いかに低次元のものであるか、その分類が臨牀的にいかに無駄であるか、Zakariaなど終末現象で患者さんを救う意味からは、くそくらえと喝破され、それらを聞いた会員は、明日から「神経痛」や「かぜによる頭痛」など



重要性が強調され、次いで特別講演が名誉会員である中山恒明教授により50分にわたって、医薬の過去と現在、未来の問題点についてのユニークな講演があり、参会者の感銘が深くされた。次ぎに田中洋(昭15年)医学県支部長、茂木武男(昭19年)(現日本薬剤師会常任理事)薬学県支部長、末永直光(昭20年卒)医学横浜地区会長、それぞれの立場からの挨拶があり、また池田薬学部教授からも挨拶があつた。長老の亀田威夫(大

と豊かな診断はつげなくなり、又致命的な「クモ膜下出血」や「脳腫瘍」を見落として、患者さんの生命を落とす愚率はなくなるであろう。

最後に昭和55年56年度中に物故された会員名を記して御冥福を祈ります。

今井五郎先生(昭15年)。杉山哲次郎先生(昭24年)。堀内孝之



先生(大10年)。山口一雄先生(昭24年)。福山敏雄先生(昭18年)。大森翠先生(大10年)。戸賀崎義泉先生(大6年)。上石一男先生(昭13年)。吉井喜一先生(大5年)。荒岡弘先生(昭25年卒)。

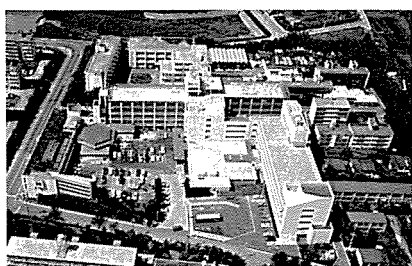
田田和俊総務理事 (昭27年)

6年)医学会員の発声により乾杯を交わされた後、懇親会に移り、全員の紹介に続いて医学薬学からこもごも歌やかくし芸が披露されて、九時三十分、高木皓次(昭17年)薬学県副支部長の閉会の辞で、来年の再会を約し、楽しいひとときであつた。

石井克己(昭24年)理事
文責 田田和俊(昭27年)理事
村瀬一郎(昭38年)幹事
大矢和光(昭50年)幹事

千葉労災病院

院長 百瀬 剛一 (昭和13年卒)



京葉臨海工業地帯を有する千葉県では、これらの事業場における労災医療の万全を期するため、昭和35年7月、労働省及び労働福祉事業団に対して労災病院の設置を強く要望した。

このような情勢を背景にして、労働福祉事業団では昭和37年現地調査等の調査検討を行い、――千葉大学医学部をはじめ千葉県及び千葉労働基準局の支援を得て、現在地に当院を設置することに決定した。

建設工事は、昭和38年1月から開始され、昭和40年1月に完成、翌月2月20日開院式を挙行し、同月25日、内科、外科、整形外科、神経科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、泌尿器科、放射線科及び麻酔科の10診療科と病床数300床をもって診療を開始した。

かくして、当院が誕生し、当時

としては、県下唯一のリハビリテーション訓練棟をはじめ、コバルト治療棟、中央検査室等を含む、近代的な医療設備を有する病院として衆目を浴びることとなった。

その後、昭和42年4月に脳神経外科を新設、さらに昭和47年6月には職業性疾病の予防、診療活動を充実するため、健康診断部を設置するなど逐次内容を整備して、労災医療はもとより地域医療に大きく貢献することとなった。

また、労災病院の看護婦の需要の増加に伴い、昭和49年4月労災看護専門学校を併設し、人材の育成にあたっている。

一方、市原市の人口は、開院当初は11万人であったが昭和45年15万人、昭和50年19万人、現在約22万人と急増し、首都圏のベッドタウンとしての人口の流入が著しく、この傾向は、今後ますます強まることと予測される。

これに対応する市原市の医療機関は、50床・200床程度の小規模病院が多く、公的総合医療機関としての当院に対する地域住民及び事業所からのニーズがますます強くなってきた。

また、高齢化社会の到来を迎えて、中・高年齢労働者の健康保持、職場環境からくるストレスによる精神衛生と労働者の健康管理が重要になってきたこと、最近の婦人労働者の職場進出に伴う母性保護と医療確保が必要になってきた。

当院ではこの情勢を踏まえて、地域医療及び勤労者医療に対応するため、昭和50年度から6カ年計画で病床数を100床増床し、産婦人科、小児科の新設を含む中央手術室、放射線科、中央検査科及びサービス棟等の総合的な増改築工事を行い、本年3月末にすべての工事の完成を見た。

この完成に伴い、当院の建築延べ面積は、二万五千平方メートルの近代施設に面目を一新し、病床数400床、診療科は15科を有し、医療スタッフは、医師38名を含み322名余、主要医療機器としては、全身

鹿島労災病院

院長 坂巻 皓 (昭和25年卒)

設置計画は鹿島臨海工業地帯の開発に伴う勤労者増に対応すべく昭和四十四年茨城県が起案した、鹿島地区生活環境整備計画の一環としてとりあげられ、翌四十五年茨城県・同医師会・地元医師会・鹿島地区進出企業協議会等により茨城県労災病院誘致期成会が構成されて誘致運動が始められた。

労働省・労働福祉事業団では、此の地元の要望に答えて同四十七年基礎調査を終り、翌四十八年より工事に入る予定であったが、地元医師会等と調整が必要となり、茨城県・県医師会・郡医師会・地元企業・茨城労基局・事業団の代表からなる労災病院運営協議会に於て協議を重ねた結果、同五十六年度より本工事に着手、同五十八年度竣工に至ったもので、延々八年に及ぶ迂曲曲折の末漸く誕生し

用コンピュータX線断層撮影装置をはじめガンマカメラ等最新の医療機器を整備し、千葉大学医学部の支援のもとに千葉県における勤労者医療のセンターとして、また、地域医療における総合医療センターとして活動することとしている。

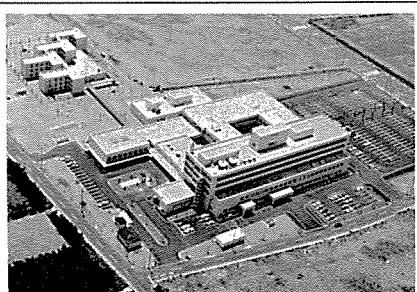
初代院長 河合直次先生 (昭和40年2月・44年9月)
二代目院長 石川芳光先生 (昭和49年9月・54年8月)
所在地 千葉県市原市辰巳台東2ノ16
電話 〇四三六七一 一一二二

近海漁業の根拠地として、又水産加工を業とする他は、米を主とする純農村地帯で生産性の低い農業経営が行われるのみであった。

近年我が国経済の新たな発展のため国家的・雄大な計画に基づいた鹿島臨海工業地帯の造成が決定されて、この寒村が大工業地帯として脚光を浴びることになった。

鹿島臨海沿岸の砂丘地帯を逆Y字型に掘り割って築造された鹿島港は二十万噸級の大型船舶が接岸可能で、原材料の荷上げ、製品の積荷に全く陸路を用いない合理的且つ全天候型の世界第一の人工港として門戸を大きく世界に開いている。この港を中心に、日本の主要産業である鉄鋼・石油その他の大工場が集中し、パイプラインがこれ等を有機的に結び機能の且つ雄大な、コンビナートとして始動している。

病院の概要を述べると、総工費約六十五億円、敷地面積約四万九千平方メートル・建物総面積約一万五千



平方メートル・本階五階建。一階は医事・中央カルテ・外来・リハ・放射線・薬剤・剖検・給食部門、二階は手術・中材・検査・管理部門、三、四、五階は各フロア百床の病棟となっており、設備機器は省力と即時性を旨として極力自動化・最新のものを導入した。標榜科は内科・外科・整形外科・泌尿器科・眼科・耳鼻咽喉科・理学診療科の七科であるが運営協議会の了承のもとに院内クローズド体制として、神経内科・脳神経外科・皮膚科を擁して実際の医療ニーズに夫々専門医として答えている。

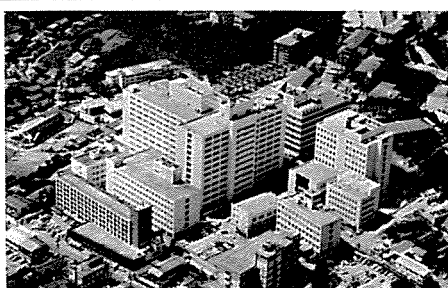
労災病院は、産業災害による被災労働者の診療と社会復帰を第一の目的として来たことは勿論であるが、近年の高度経済成長の過程での産業構造の変化・労働環境の変化に伴い、被災の観念も又変化しており、単なる外傷のみでなく各種の職業性疾病が問題となってきたのは当然のことであり、更に又高年齢化社会の到来による中高年齢労働者の疾病・健康対策或は又女性労働者の健康管理も、労災病院の使命として取り組まねばならぬ重要な課題であり、単に産業災害のみならず勤労者を取り巻くあらゆる医療ニーズに対応して、高水準且つ総合的医療機関として勤労者医療に更に又地域医療に貢献する所存であります。

所在地
〒314-03 茨城県鹿島郡波崎町矢田部
電話 〇四七九四一 八四一一

埼玉医科大学だより

前田 和一 (昭和26年卒)

埼玉医科大学は昭和47年5月に開学した、まだ創立十年に満たない若い大学です。所在地は、秩父の山なみが武蔵野の平野に移りゆく、埼玉県でも最も西のはずれに近い、入間郡毛呂山町というところにあります。その山すそに二万坪を超える敷地をもつて建てられた大学です。したがって交通の便はあまり良くありません。東京からですと、池袋から東武東上線で五十分くらい乗りますと坂戸市という駅に着きますが、そこから越生(オゴセ)線という支線に乗り換えて東毛呂(ヒガシモロ)という駅で降りることになります。もう一つは、八王子と高崎を結ぶ八高線という国鉄の、毛呂という駅で降りるかしりません。したがって患者さんは自動車で来院せ



るを得ないわけですが、それでも、周辺の川越市、上福岡市、東松山市、飯能市などに大きな総合病院がありませんので、院内にあるいくつかの広い駐車場はいつも車があふれて困るほどです。ということは、患者さんも非常に多く、それに地域の特殊性から、この科も一次医療から二次・三次医療までの極めてバラエティに富んだ症例にお目にかかれますので、研修医の教育などにはもってこい

です。
当大学に在任している千葉大学出身者は、第三内科に伊藤進教授(昭26卒) 栗原稔助教授(昭36卒) 一戸彰講師(昭45卒) 小児科に前田和一教授(昭26卒) 松本生講師(昭36卒) 諸岡啓一講師(昭41卒) (宮路太助手(昭47卒) 小出博義助手(昭49卒) 森野正明助手(昭50卒) 伊古田(旧姓古藤) 裕子助手(昭51卒) 鈴木文晴助手(昭53卒) が、公衆衛生に竹内端弥教授(昭27卒) 精神科に真栄城尚志助手(昭41卒) 第二病理に塩田敬助手(昭48卒) がおり、それぞれ活躍しております。
当大学は来年五月開学十周年を迎えるわけですが、その間、年毎に建物が増えてゆき、内容も相当地に充実してまいりました。現在

は大学としてのベッドが360床あり、その他に附属の毛呂病院に属する精神科、重症心身障害児施設等の諸施設があり、それを加えますと、非常に多数の患者を敷地内に収容していることになりました。この教室もまだ人員が不足で、関連病院の問題を含めて患者の診療に追いついていないような面もありますが、設備が充実するにつれて、研究面でも着々と成果を挙げつつあり、来年三月には大学院の第一回生が卒業するまでになりました。ただ、国立大学と大いに違うところは、教育スタッフが学生のための国家試験対策に振り廻され、大幅に時間をとられるとい

う、いささか次元の低い現実的な問題で悩まされておりますが、これもやむを得ないことでしょう。ともあれ、新設大学は各科の垣根が厚くないので協力態勢がとり易いといったような、それなりの利点もあります。
それに埼玉県には、るのとは学会の会員も多数御活躍で、いろいろ御気遣いいただいておりますので、大変心強く感じております。同窓の先生方にはどうか今後ともよろしく御支援下さいますようお願い申し上げます。

大谷克己教授 (解剖第三講座)

開講十五周年

記念講演会開催

大谷克己教授には昭和四十年二月に着任され、昨年で開講十五周年を迎えていたが、昨夏の教室移転等により一年間繰り延べて去る七月二十五日(土)に開催した。日頃から大谷教授と親交の深い榎林・田崎両先生が下記のような演題で特別講演を行った。
「小脳・間脳の連関の臨床的分析」 榎林博太郎教授・順天堂大・神経科 (座長・堀江武助教授・千葉大・脳外科)
「網膜遠心性神経について」 田崎京二教授・東北大・生理学 (座長・川村光毅教授・岩手医大・解剖)
また大谷教授は教室十五年の研究の歩みをふり返った後、「医大の牛頭天王」と題して医学部講内

ちんり中国②

萩原彌四郎

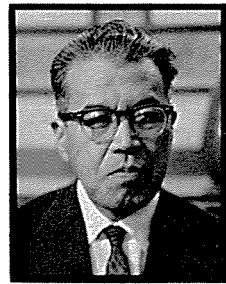
北京にいま建造中の日中友好病院は、日本政府がとくに力を入れている近代病院で、竣工の晩にはこれを「中西医合作」のモデル病院にしようというものです。つまり、中国の伝統医学(中医)の積み立てに、近代医学(西医)の智識と技術を加えようとするものです。

日本ですと、このような病院ができると、大学や大病院からスタッフを得ることは容易で、むしろ売り込みがあつたりする程ですが、現在の中国では、この点に大へんな困難があります。それは①北京にも六年生の医学院や大病院(たとえば首都病院・もとのロツクフェラー病院)などがあり、そこには西医の智識を身につけた高度の研究者・医師がいるのですが、これらの施設ではスタッフが一人でも減ると、現状を維持できないとして人を出してくれない。②中国全土の他の大学や病院には少なうとも西医に関する高いレベルの人が極めて少ない。などの理由によります。
その原因は明らかに一九六六年に起こった文化大革命にあると言えましよう。「人民みんながほぼ等しいくらしをし、働いたにちじ分を取る」という始の発想は良かったのでしようが、これがエスカレートするうちに科学軽視となり、奪権闘争となつて行つたのは

- ご存知のとおりです。六年生の大学は極期には三年に短縮されていきました。不十分な教育を受けたものが医師として地方へ行き、いわゆる赤脚医(はだしの医者)が沢山にできました。外国語もほとんど連語位だったようです。
中国が国是として活動の重点を農業、工業、国防および科学技術におくようになったのは一九七八年の暮です。まだそれから二年とちよつとしか経っていません。中国はいま、文革による遅れを取り戻そうと最大の努力をしています。
その一つの現れが中日友好病院の設立にあるといえましよう。スタッフの養成は年次計画で進められますが、目下本学には今年度の研修員の約半数に当る七人の方が来学しています。皆熱心にそれぞれの教室で指導を受けています。なお道は遠いでしょうが、その熱意には敬意を表したいと思ひます。かたい話になりました。喫茶室へご案内しましう、以下はメニューから、(一)内は元立ての値段です。意外なものが高かつたりして驚きます。
①可口可禾(一・五〇) ②矿泉水(〇・六〇) ③花茶(〇・二〇) ④西洋柿汁(〇・六〇) ⑤特制汽水(一・五〇) ⑥氷激凌(〇・八〇) ⑦啤酒(〇・九〇) ⑧その他 ⑧咖啡 ⑨計司 ⑩西菓
①ココア ②ミネラル・ウォーター ③ジャスミン茶 ④トマト・ジュース ⑤上等ジュース ⑥アイスクリーム ⑦ビール ⑧コーヒ ⑨チーズ ⑩西洋料理

鈴木正夫名誉教授を偲んで

本 間 三 郎 (昭和21年卒)



鈴木正夫先生には本年八月十三日に逝去されました。大正十三年に東大を卒業され、昭和二年千葉医科大学助教授として赴任され、昭和四十年定年退官されるまで、実に四十年近く、生理学の研鑽、医学教育および大学の管理運営に尽力されました。

講義中は恥じらいのためか、学生を直視できず、汗をふきつつ、教壇を気ぜわしく動きながら、時間一杯講義された。余りにも几帳面に講義され、ジョークによって、学生を笑わせるといふことはなかった。いささかドモられたこともあって、学生にとって、生理学は極めて難解のものであった。ただ教室員となつて改めて講義を聞きますと、その一言一言は吟味され、日本語に適當の語彙のないときは外国語を混えられ、体系を歴史的基盤にたつて説明されるなど、その高き格調に感銘を受けたものであった。戦後間もない頃、数名の学生しか出席しないのに対して、教室員を総動員してその席を整えたが、途中眠りに入った教室員の

前のテーブルを指し棒で叩かれ、受講者の全員を仰天させるなど、古き頃の教授の風格を備えておられた。私は不器用であるからと、スポーツはやらねず、散策を好まれた。千葉をこよなく愛され、万葉の地を追憶された。風貌からして、愛称がつけられていたことは、学生にとつて畏敬と共に親しみを感ぜさせ、特に酒宴ともなれば、学生は愛称によつて先生を呼び、生きることなく杯を重ねられた。

生理学研究については、生体の興奮に対する環境条件の作用の研究であるが、その精細な研究成果から、環境条件を分類された。これを戦後日本生理学会の英文版が創刊されるや、それに投稿、成果を世界に問われた。この研究はドイツ留学後開始され、数多くの研究をまとめられ、分類されたもので、その構想は戦争前にたてられたように思われる。ただそれから十年後の昭和二十五年に発表されたため、評価は半減されたのではなからうか、混乱した時代とはいえ、先生にとつて惜まれる。この研究が主流となり、環境条件の一つである通流作用が取りあげられ、それが定年ご退官までのお仕事となつた。

先生は氣宇壮大であられる反面、綿密な計画のもと、細心の注意を払つて実験研究に臨まれ、多くの後進を育成された。千葉大学医学部第一生理学教室の第二代教授として、戦争という研究にとつて最

大ニ会「まわりどつろろ」

「まわりどつろろ」が静かに止まりました。この世にも稀れな、七十年にも及ぶ友情、そして、その現れとしての大ニ会回覧通信の回りが、佐藤隆房先生の逝去によつて幕をとじます。と大津肇氏(大2卒故大津保氏(長男)が跋文に書かれていたように、千葉医学専門学校大正二年卒業生の、家族ぐるみでのクラス会が大ニ会、その回覧誌が「まわりどつろろ」である。

佐藤先生は花巻共立病院の開設者であり、広く地域医療に貢献される一方、宮沢賢治詩碑の建設に主要な役割を果し、高村光太郎晩年の良き協力者として活躍、賢治・光太郎両者の業績を後世に遺すた

悪の時代を過ごされながら、今日

の生理学教室の礎を基かれた。

財団法人猪之鼻奨学会は六十余年を通じて母校のために貢献しつづけて来て居り、現在でもその活動は衰りなく続いているにもかかわらず、意外とご存知の方、ご利用の方が少ないので、この度本紙面を借りて簡単に紹介いたします。

本奨学会は一九一五年(T.4)当時の千葉医学専門学校校長、三輪徳寛教授の在職二年記念に際しての資金をもちとし、これに数件の篤志を加え、資産五千円余をもつて創立されたものです。医学および薬学の研究を奨励するという

猪之鼻奨学会について

目的に従い、医学・薬学の優れた若手研究者に研究補助金を与え、両学部(学生(含大学院)に学費の貸与を行うことを毎年続けています(ただし後者には卒業後返済の義務があたりません)。

一方、同窓会館や医学部記念講堂の建設に当つては、資金的に多大の援助をなし、千葉医学雑誌の発行が財政的に危機に陥つた時も毎年の援助を行ないました。

現在の会長は第七代の松本勝名誉教授、市内中野町に三千坪の土地を持ち、資産総額は約三千六百

万円。役員も若返つて頭初めの目的をより効果的にこなせるよう努力しています。なお本会へのご寄附は免税の対象となり、また指定寄附の場合には特定の教室または個人の研究を助けることもできます。なにとぞこの制度をご活用の上、母校の益々の発展にご寄与下さるようお願い申し上げます。お問い合わせは千葉大学医学部内猪之鼻奨学会事務局(T.E.L.〇四七二一〇二一七七一 内線二〇三八)へお願いいたします。

計 報

- 仲野信司氏(昭和7年卒) 56・7・26死亡
- 上野 堯氏(大正10年卒) 56・7・6死亡
- 林英一郎氏(大正12年卒) 56・8・4死亡
- 鈴木正夫氏(名誉会員) 56・8・13死亡
- 久根間敏氏(昭和34年卒) 56・8・13死亡
- 田崎 秀氏(昭和16年卒) 56・6・15死亡
- 野島 清氏(昭和18年卒) 56・7・23死亡
- 菅沼義之氏(明治43年卒) 56・6・22死亡
- 久保 功氏(昭和8年卒) 56・7・13死亡
- 松野 至氏(昭和8年卒) 56・8・31死亡
- 秋山瑞男氏(昭和19年卒) 56・9・20死亡
- 国井英男氏(専26年卒) 56・9・20死亡
- 森 淳氏(大正10年卒) 56・9・22死亡

お知らせ

昭和56年度るのはな同窓会総会において会費に関する会則の改正が承認された。その内容は、卒業50年を経た会員(昭和6年卒以前の会員)は会費を納入しなくてもよいということです。永年同窓会のため御尽力頂き有難うございました。

編集後記

○秋も深まりました。会報78号をお送り致します。本号にも多数の原稿を頂き、六頁となりました。一面は新任教授の紹介の記事のみとなつてしまいました。昇任をお祝ひします。会報の内容その他につきご意見あれば遠慮なくお聞かせ下さい。

○喜ばしいニュースとして、宮内好正氏(第一外科助教授・昭和30年卒)には、先般熊本大学第一外科教授に内定し、近く発令・赴任の予定だ。次号に抱負のほどお聞かせ頂くことになっております。今後の活躍期待します。

○のはな台の動きとしては、ゐのはな地区合同校舎(旧医学部基礎教育棟)の改修工事が竣工し、共同施設として、看護学部・看護学校・助産婦学校・診療放射線技師学校等が共同することになる。ゐのはな台の整備が少しづつではあるが進んでいる。(奥井勝二)